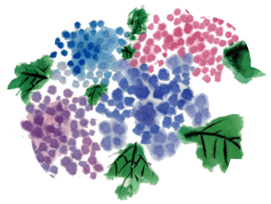
すなお

令和元年７月号

おやのことば

しようと思うて成るやない。
しようまいと思うても成って
来るのが、いんねんの理という。

明治二十七年五月三十一日



会　長

【しようと思うて成るやない。しようまいと思うても成って来るのが、いんねんの理】

こうしたおさしづはよく聞かせて頂きます。私達が生きていく中でこうしたいと思ってもなかなか成ってこないこともあれば、してはならない。また、そうなりたくないと思っても成ってくることがあります。これがいんねんと教えられています。このいんねんは悪いいんねんのことを指します。

先人の思いとしてこのいんねんを切り替えることこそが、信仰の目指すべき方向だとも言われています。例えて申せば(お父さんが酒乱で苦労をしているお母さんの姿を見て、自分はお酒を飲まない人と結婚すると心に決めて結婚した。それまでは一滴も飲まない人だったのに結婚した途端に飲みだして、、、)

運命の川の流れに流されると、どうにも止める事はできません。これは一生をかけて川の流れを変えるしか方法はないのです。その為に何をするかと言えば「人をたすける」行動をし続けることです。日々の小さな積み重ねかもしれませんが、これで必ずいんねんを切り替えることが出来るのです。

すなお（立教１８２年７月号）

通　巻　No.708
発行所　天理教瀬戸路分教会
794-0007　今治市近見町4-5-10
☎　0898-23-5004
FAX　0898-23-5123
発 行 日　2019.7.16
責任者　二 宮 英 治

竹の成長

深谷　善太郎著『だけど有難い』より引用

毎年、暑さと共にやって来るのが「こどもおぢばがえり」です。これは、私が少年会本部の委員長時代に出会った、ある親子の話です。

その子供さんは、とても重い病気にかかっていました。教会の団参には参加できないので、個人で参加しようと、お母さんがその子を抱いておぢばへ帰ってこられました。そして、こどもおぢばがえりの行事受付に来て、「子供が病気ですが、どうしても参加したい。神殿で参拝してプールを見学したいんです」と言われました。そういうことならと、係の者が二人を先導して本部神殿を参拝し、プールを見学して、その後、帰参報告に記入して自宅に戻られました。後日、少年会にお礼状が届きました。「おかげさまで、子供の病気をご守護いただきました」と書かれていました。

暑いさなか、それも重い病気ですから、おぢばへ帰っても、どの行事にも参加できません。それでも、この母親は子供を抱いて帰ってきました。以前に参加した楽しさが忘れられず、どうしてもこどもおぢばがえりに行きたいというわが子の思いを叶えてやりたくて、親子で帰ってきた。親神様は、その心を真実とお受け取りくださって、子供をたすけてくださったのです。こんな大きなご褒美をもらったということがありました。　　～後略～

教会ニュース

霊祭について

8月1日、変更なしにつとめさせて頂きます。

こどもおぢばがえりへ

8月3日に教会を出発して、4日パレード出演、5日夜に帰ってきます。ラストパレードになりますので、共に帰ろうと思われる方、また出演したいと思う方は早めに会長まで連絡を下さい。

婦人会創立110周年 日々の理御供 報告

6月には52,500円を上級葛城へ運ばせて頂きました。2020年4月までつとめさせて頂きますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。

瀬戸路分教会エコプロジェクト　　～太陽光発電状況～

6月16日検針で2,020kWh発電し、78,537円の売電金額となりました。
総発電量101,046kWh、3,956,550円の総売電金額となりました。

心の風景

鈴　代

随分以前の話になるのですが、
「奥さん、瞼が上がらんなったんです」と不安いっぱいの電話を受け取った。「え、、、？」急いで駆け付けた病室で、両目を閉じたままの婦人の姿に驚いた
食事をするのも、着替えをするのも、全て瞼を指で持ち上げてその姿は痛々しくて言葉に詰まった。「急になったのです、、、、、、、」予想もしない症状である。
「なんでもどうでも、、、、、、」私の必死な祈りが始まった。
そして、少しずつ快方に向かって下さり、胸なでおろした頃、、、。

その日、私はお地場へ発つ支度をし出発寸前だった。
瞼が下がらないと苦しむ青年が両親に伴われて教会に来られた。
私は自分の耳を疑った、「朝夕瞼が上がりますように」と真剣にお願いしていた時であったから「え？瞼がさがらないのですか？」
何日も眠れないと悲痛な顔をして訴えられた
医者、薬、針、祈祷、あらゆる処へ行ったのですが、、、、、
パッチリ見開いた目が痛々しかった

知人から教会のこと、奥さんの事を聞いて訪ねてきたんです。
付き添っておられた両親の声は震え、その姿は見るに忍びなかった。
即座に「私と一緒に御地場へ帰りましょう」と促し
そのまま、青年を伴ってその夜の船で御地場へ向かった。
そして、御地場で見事に御守護頂いた。

身近に二人の病み苦しまれる姿を見せて頂いた私は
以来、今も忘れず守っている事がある。
先ず朝の目覚めに、パッと瞼が上がることを喜び
「お休みなさい」と布団に入って瞼が閉じてくれることを喜び
それまで全く、当たり前のように思い暮らしてきた事のお詫びと、
どんな出会いも私への親神様からのメッセージなんだと喜んでいる。
又一つ感謝とお礼が見つかった。有り難いことがいっぱい。